

福地源一郎 ～誕生から明治維新まで～

本会幹事 草場 里見

福地源一郎(櫻痴)は、明治時代のジャーナリストの草分けであり、大蔵官僚、劇作家、小説家としても活躍した。また、歌舞伎座を創設した一人でもある。幅広く活躍した人であった。

1. 長崎時代

源一郎は、天保12年(1841)3月23日、新石灰町(現油屋町)に父苟庵、母松子の1男7女の末子として生まれた。幼名は八十吉、元服後に源一郎と称した。号は櫻痴。

3歳の時、家が火災に遭い、新石灰町から本石灰町に転居した。4歳から父苟庵に『孝経』、『三字経』を口授され、5歳で父から読書・習字を授けられた。

7歳から長川(おさがわ)東洲について約10年漢学を学ぶ。長川東洲は長崎では有名な漢学者だった。

幕府の教学機関昌平坂学問所(昌平黌)が行う試験である「素読吟味」を10歳で、「学問吟味」を13歳で受験し、それぞれ甲科に挙げられ、世間から神童と呼ばれた。

15歳の時、阿蘭陀大通詞名村八右衛門からオランダ学を学び、安政3年(1856)12月、16歳で名村八右衛門の養子となった。八右衛門の長男五八郎が江戸で通詞として幕府に仕えていたため、長崎の名村家を継ぐ跡取りが必要となり、源一郎を養子として迎えたのである。



「福地櫻痴生誕の地」の碑

同年、長崎聖堂に学問再吟味を申し出て、甲科に合格した。褒美に銀2枚、金100疋をもらった。安政4年(1857)5月、17歳で阿蘭陀稽古通詞となり、出島のオランダ商館に日々出張した。



長崎聖堂大学門

オランダ船が入港するたびに海外の情報をオランダ商館長が作成し、風説書として長崎奉行所に提出。それを名村八右衛門が口授翻訳して、源一郎に筆記させていた。源一郎は、商館長が出島にいながら、どうして世界の出来事を知ることができるのか、名村にわけを聞いたところ、西洋には新聞というものがあることを教えられた。源一郎と新聞との最初の出会いであった。

安政5年(1858)7月、源一郎が才能に任せて自由に行動したことが、名村八右衛門の弟子や家内の者から反感を買い、名村家を離縁された。同年

12月、咸臨丸で江戸に上った。

2. 幕府御家人となる

安政6年(1859)森山栄之助塾でイギリス学を学ぶとともに、栄之助の薦めにより幕府に仕えた。このころ福沢諭吉とも交流があった。同年5月26日、外国奉行支配通弁御用御雇を申渡され、直ちに命を受けて品川へ出張した。この後、外国奉行水野筑前守忠徳とも親交を深めた。

文久元年(1861)6月、21歳の時、栄之助の世話で、江戸の町民鎌田さと子と結婚した。

同年12月、開港延期交渉使節の通弁方としての初の海外渡航に出かけた。翌年、フランス、イギリスなど6か国を訪問し、12月に帰国した。

慶応元年(1865)5月、横須賀製鉄所(後の造船所)設立準備のため、遣欧(仏・英)使節団に加わる。パリでフランス語を学ぶとともに、西洋の演劇や文学に興味を抱き始めた。

慶応2年(1866)1月、帰国。3月、外国奉行調役格・通弁御用頭取となり、將軍に拝謁できる御目見以上の士分となった。同年6月、下谷の自宅邸内に在官のまま学塾を開き、フランス語と英語を教えたが、幕府から職を辞するか学塾をやめるかを迫られ、やむなく学塾を閉鎖した。

慶応3年(1867)11月、大政奉還後の善後策を小栗上野介に上書したが、用いられなかった。この年、『那破倫兵法』(英訳書の翻訳)を刊行した。

慶応4年(1868)閏4月3日、自宅において「江湖新聞」第1号を発行した。しかし、佐幕主義、会津擁護の論調のため、5月18日、新政府に逮捕・投獄された。6月、無罪放免となったが、「江湖新聞」は第2号を最後に発行禁止となった。福地源一郎は、日本における近世新聞雑誌の筆禍第一号となった。同年7月、新政府より役人として仕えるよう命令されたが、病と称して辞退した。

明治元年(1868)10月、妻を横浜に残し駿府に赴いたが、11月、幕吏を辞職し江戸に帰った。その後、浅草で「夢の舎」と号して戯作などで暮らした。この年、『外国事務』を翻訳出版した。

福地は多彩な才能を持った人物で、この後、官界や言論界、文芸界などで一世を風靡する活躍などをみせるのである。

本稿は令和7年10月例会の発表の要旨である。

参考文献

柳田泉『福地櫻痴』吉川弘文館 昭和64年新装版
田村寿『三代言論人集 第3巻 福地櫻痴』時事通信社 昭和37年

福地源一郎『懷往事談』民友社 明治27年

柳田泉『福地櫻痴集』筑摩書房 昭和41年